

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授受記録第三五二號
昭和二十六年八月廿五日印刷 昭和二十六年九月一日發行

浄土

第十七卷

第九號

九月號

山莊の秋日

吉田絃二郎

彼岸の話

佐藤密雄

大樹寺と家康

佐山學順

浄土信仰の本質

眞野正順

1951

9

部分と全体

或る有名な細菌學の泰斗が、孫達を膝のまわりに集めてよい爺さんぶりで遊んでいた。そのうちおやつの時間になつたので子供達に苺の皿を配ばつて、

「お前達にはむづかしいけれど、この苺は赤くて美しい。おいしさうだ。だが、これには目にみえぬ黴きんが一杯ついていて、そのままたべると病氣になるのだよ。だから、苺をたべる時は必らず水でよく洗つてたべなさい」

コップの水で苺を洗いながらそう教えた。それから、彼は蘊蓄を傾けて、ばいきんがどんなに恐ろしいかをとうとうと説明した。子供等はあつけにとられて、よく喋る祖父の口もとを眺めていると、喋り疲れて、ウッスラと汗をかいた祖父は、のどの乾きを感じて、ついうつかりと、恐ろしいばいきんを洗つたコップの水をゴックリ飲んで汗を拭いた。

科學とはこのようなるものである。原子力を平和的動力に用いるが是か、爆彈に仕込むが非か、科學はこれを教えてはくれない。偉大なる科學者にして物の美醜、ことの善惡を判別し得ず、偏つた人生に行き悩む人もある。

道徳も、藝術も、矢張り同じく、人間の生活全體を豊かにしつつむことは出来ない。カンバスに向えば美麗極まりない傑作を生み出す畫家のアトリエの亂雑さ、その行爲一點の非のない道徳者にして、もののあわれを味合せずに枯巖秋月のひからびを示めす。

人の生活を大きく、方向づけ、色づけて行くもの、その中に凡ゆるものを含んで豊かに潤おはして行くものは、宗教以外の何ものでもない。宗教は全體である。(竹中)

目次

彼岸の話	佐藤密雄(4)
虫のお念佛	三喜まさし(17)
古寺めぐり	安居香山(12)
九月のメモ	(14)
山莊の秋日	吉田絃二郎(1)
大樹寺と家康	佐山學順(22)
お彼岸談話	中村康隆(14)
俳句と信仰	佐藤治子(11)
淨土信仰の本質(二)	眞野正順(8)
芝園だより	



山莊の秋日

吉田 絃二郎

浅間は今日も静かに白い噴煙をたなびかせてゐる。浅間の山肌は日に日に柔かな秋の色を濃くしてゐる。

山莊の窓を開いて浅間をながめ半日何を思ふともなく懶怠な日を送る。

東の空が登みかゝるところから渡り鳥のおびたゞしい群があわたゞしい羽音を立てゝ、北から南へ、南へと黎明の空をかける。渡り鳥の羽音は秋の寂しさの眞つたゞなかを貫いて、遠ざかりゆく。

わたくしは朝毎に窓近く鳴きつれてゆく渡り鳥の聲を聴く。そこには幽久の聲があり、無限の宿命がある。それはわたくしたちに何を語つてゐるか知らない。しかし

それはわたくしたちに、言葉以上のものをさゝやいてゐる。

人間が編み出したいかなる哲理にも、いかなる賢い言葉にも見出すことのできない深いもの、幽玄なものをさゝやいてゐる。たゞわたくしたちの知識は、それを如實に把握し得ないだけである。しかし、わたくしたちの智慧はそれを観ずる。

わたくしはこゝの落葉松の山に入つて、渡り鳥を聴きはじめてから、すでに三十年近くになる。秋になつてこゝの山莊にこもるごとに渡り鳥を聴くことを楽しみにしてゐる。わたくしはそこのかすかな渡り鳥の聲から何も見

出すことはできない。しかしわたくしは毎年、山の秋が來るごとに渡り鳥の聲を待ちわびてゐる。それは言葉以上の言葉をそこに觀するからである。

渡り鳥の聲は單調である。しかし、朝まだき眼をつむつて、そのあわただしい羽音と鳴き聲とを聴けば、そこにも生けるものゝきびしい宿命が感じられる。遠い北の海をわたつて南へ南へとかけりゆく宿命の旅に、或ひは嵐につばさを折られ、或ひは霧の中に岩に頭をたゞきつけて冷たくなつてしまふものもある。かれ等の鳴き聲は妻を失つた雄鳥の妻を呼ぶ聲でもあり、夫を失つた雌鳥の雄鳥を呼ぶ聲でもあらう。

霧の深い朝、高原の町の電柱に觸れて、頭を碎いて死んでゐた渡り鳥の冷たい死骸を掌に感じた日から、わたくしは渡り鳥の聲を聴くごとに、寂然たるかれ等の宿命を感じないではをられなくなつた。

渡り鳥の宿命は同時にわたくしたち人間の宿命である。あのかすかなしきあわただしい渡り鳥の羽音を聴いてゐると、わたくしたちにも「死に支度致せ致せ」と

呼びかけてゐるやうな氣がする。

山莊の静けさを破つて時々蛇が羽音を立て、身近かに迫つて來る。蛇は厄介なものであるが、秋の山莊の静寂になどむそのつばさの音はなつかしいものである。

つい、このごろわたくしをたづねて來た客人は一蚊の聲はいゝものですなあ」と語つてゐた。わたくしは久しい間忘れてゐた尊いものを、想ひ出したやうな氣がした。

平常わたくしたちは蚊は憎いものとばかり思つてゐる。だから蚊の聲を延けば直ぐに殺すことばかりを考へる。

しかし静かな部屋の薄暗がりの片隅にかすかに鳴く蚊の聲には、惹きつけられるものがある。とりわけ秋も老けて、夜毎に細りゆく蚊の聲には、秋の寂寞を一身に、こめたやうなあはれさを感じる。

わたくしの故郷は筑紫の平野であり、そこには沼が多く、蚊が多い。沼のほとりに興一といふ男がゐた。わたくしはかれのために日本外史を讀み、算術五百題などを

説いてやつた。沼に臨んだかれの二階の部屋には蚊が多かつた。かれは警視廳の巡查の試験を受けるために獨學してゐたのであつた。かれは頭はよくなかつたが、人間としては無類の善人であつた。

わたくしは東京に出て、十幾年振りで故郷を訪ねたをり、與一が兄夫婦を斬つて監獄に入れられたといふ話を聞いた。わたくしにその話をしてくれたかれの養母は泣きながらあのやうな善人はありません」ともいつた。數年後かれは獄中で死んだといふことであつた。

かすかな蚊の聲を聴く時、わたくしは與一を思ひ出すことがある。

この二三日草津に通ふ高原電車の音が、かすかに聞えるやうになつた。もう北風が吹き初めたのだ。落葉松も落葉しはじめた。山は冷たい雨にとざされはじめた。わたくしは數年前この山莊で冷たい雨のころ毎日を寫經に送つたことを思ひ出す。京都の麴屋町に育つて、嫁して一女を儲けたばかりの若さで亡くなつた女の冥福を祈つて經を寫したのであつた。

螢の歌

眞野先生の三回にわたる放送「行誠上人」を拜聴して今更のように上人の遺徳を偲んだ。私の手元にも上人の染筆が二三ある。そのうちの一つに、

此ころはおこたかりかちの窓ちかく

むかしまねひでよふほたる哉

という短冊がある。たまたま結城素明編輯の「行誠上人遺墨集」を繙いていたら、これと同じような短冊の寫眞版が載つていた。書體もほゞ同じであるから、同じ頃の筆と思われる。たゞ「おこたかりかちの窓ちかく」が「おこたかりがちの窓の戸に」と變えられている。それから上人の歌集「於知葉集」を見ると、窓螢という題で、

この頃はおこたかりがちの窓の戸に

いさめ顔にも飛ぶほたるかな

と下の句の變つた一首が載つていた。その外に、この歌集には螢を詠んだ歌が三首あつた。

上人が轉錫にお忙しくなつて、御勉強の時間も少くなつた頃の御自責の歌を思われる。私もこの頃、いろいろと内外忙しく、おだてられ追い廻されて本を読む暇もないので、この短冊を座右に掛けては、自省し自責している。たつた一枚のこの遺墨が、私にとつていかにも「いさめ顔」である。(不中庵雜記)

彼岸の話

佐藤密雄

一

おひがんは彼岸と言ふ名稱から見ても又行はれる行事から考へてもすべて佛教的であるから、お盆と同様に、此は印度とシナと日本との三國に共通な季節的行事だらうと思ひ易いのであるが、實際は日本にだけ行はれるもので、印度でもシナでも此の期間を彼岸と呼ぶこともなく、又此時期に佛事をなすこともない。もつとも、古くから龍樹菩薩御作天正驗記と名づける書物があつて、其には印度でも彼岸らしいものがある様な話を記して居る。其に依ると、トソツ天と言ふ天上界の近くに中陽院と言ふ場所があり、其中に靈所臺がある。甚だ奇怪な名稱であるが、何か登録所の様な所で、人間の戸籍帳の如きものが備えつけてあるらしく、春は花開く七日間、秋は果物の實る七日間、即ち春分と秋分の頃の各一週間づゝ此處に帝釋天以下諸天神達が集合して、人間の行爲の善惡を吟味して戸籍に印記する。そして此がやがて人が死ぬ時にその人を地獄に送るか極樂に生れさせるかの考査表となる

ものであるから、人々は此春秋の一週間づゝは佛事をなし行爲をつゝしむのであるとし、此を彼岸のことであると記して居る。此書物の外にも彼岸功德經とか到彼岸經とか言ふものが流布して、同巧異典の話を載せて居るが、いづれも佛教を粧つて而も佛教に關係のない興味本位の通俗の讀物にすぎないし、勿論日本人の作つたものである。

「彼岸七日にだんご七つ」とは越前國の俗諺である由だが、長い暑さやきびしい寒氣を凌いで來てほつと一息つく時節である。食欲も取戻される此頃に贈られる「おはぎ」の一箱は全く楽しいもの、此處で元氣を取戻せば花の春も實のりの秋も充分働けるのである。「もち米」を主として「うるち」を従として作つたものが牡丹餅で此は春のもの、「うるち」を主として「もち米」を従としたものが「萩の餅」すなはち「おはぎ」で此は秋のものとされるが、此等は米の國である日本には古い時代から作られたものと思はれ、寒氣や暑氣の明けた頃、互に健康を祝し合い今後の活動をはげまし合ふ爲に贈答したものと考へられる。従つて佛教の彼岸の始まる前から、彼岸の頃は「おはぎ」を喰

べ合つて元氣を出す頃であつたが、それが佛教が弘まると、その「おはぎ」を佛に供養して、宗教的な感謝をも加へた生活行事になつたのであると考へられる。

言葉の正しい意味からは到彼岸（行きついた）と譯さねばならぬのであるが、佛教では迷ひの此岸から悟りの彼岸へ到達したこと、若しくは生死の世間から不死の極樂に生れたことを意味するのである。即ち彼岸は原語の上からは理想の彼岸に到達してしまつたことを意味する文字であるが、其れは未だ到達しないものゝ立場から、此から到達せんとする目的の彼岸の意味に使つて居るのが、今の彼岸である。

二

お彼岸は時期としては寒期や暑期を脱した喜びの時で、同時に生きる喜びを宗教的に感謝として味ふのであるが、此を今日の彼岸の意味に高めたのは淨土教である。お彼岸に御寺へ參詣すると極樂淨土の繪圖が懸けられてある。讀經が終ると此の繪圖の解説が行はれる。彼岸の法話の特徴は六ヶ敷しい理論を述べずに、私共の宗教的彼岸である極樂淨土の様相を、目で實際眺める様に印象づけることが目的である。極樂では中央に阿彌陀如來の坐があり、其前面の七寶の臺には金色の肌をした聖衆達と清淨な白肌をした往生人とか喜々樂々として居るし、金砂を敷きつめた八功德池の大蓮華臺には、新しく迎へ入れられる往生人の慶喜の姿が見られる。極樂の繪圖を見つゝ法話を聞く人は、やがて圖中に近ける肉親の姿を描き、更に自分自身が蓮臺上に坐して居る感にひたるのである。此様にして、極樂界を眼見身感して、

目を閉ぢても明瞭に其様子を浮べ得るに到らしめるのであるが、此が終ると、夕刻、日の西に懸るのを拜するのである。紅玉の太陽が金光の中に沈み行くが、其の沈み行く所に、今繪圖に依つて眼見身感したばかりの極樂界があるのである。彼岸の中日の夕陽は極樂の東門に入るとも言はれる。若し其の思をなし得るならば、西天の輝きは、日の光に反射する極樂界の光輝である。思ひを致すものゝ思念に應じて、中日の夕陽は絶大の感激を呼ぶものである。

傳説に依ると、彼岸の中日に西天の日没を拜することは聖德太子から初まつたと言はれる。太子は今の大阪の四天王寺を建立されたが其の落成するや、御自身筆を執つて、西門の華表に「當極樂土東門中心」と記されたと言ふのであるが、此事の眞偽は別として、四天王寺の西門が極樂の東門と向き合つて居るとの信仰は往昔から今日に及び、彼岸の中日に此處で夕陽を拜するもの今に盛んであると言はれる。

御寺の佛殿の原型圖とも言ふべきものは、極樂繪圖であるが、此極樂繪圖は「觀經マンドラ」と言ふのであつて、觀無量壽經に説かれてある西方極樂の様相を、唐の善導大師が繪圖化されたものである。善導大師自身が筆をとつてなされたとも傳へられるが、或ひは當時の藝術人を指導してなされたものであるかも知れない。當時のものは現存しないが今日のものについて見ても、流石に東洋史上最高の文化時代と言はるゝ盛唐時代の構想であるから規模は雄大で然も華麗である。そして此が我國に傳はつて、我が王朝時代の淨土信仰を大いに高めたものと考へられ、又此の繪圖に誘はれて此をば地上に築かんとして平等院とか法性寺とか或ひは三千院とかの此世の淨土を思はせる建築や

彫刻が生れたのであるし、又彼岸の中に日没を拜して思ひを淨土に運ぶことが金剛般若の讀誦や法の談義よりも、一般民衆に取つての彼岸の代表行事となつたのであると考へられる。

三

善導大師に依つて極樂繪圖化された觀無量壽經は、釋尊が舍衛國の宮廷悲劇の主人公、國王夫人のイダイケの惱みを救はんとして説かれたものである。夫人の夫たる王は大國家を作り上げた偉人であつたが子のアヂヤセ太子が野心家に擁せられて父王に反逆し、政權を奪ひ、王を監禁して自ら新王を名乗つたのである。夫人に取つては、我が夫と我が子との争ひである。流石に如何なる場合も母を罰しない佛教國の印度であつたから、夫人の行動の自由は奪はれなかつたが、父子の争ひを見る母の心は惨めであつた。そして王の幽閉は、飢えに依る死を企てられてあるもので監視が嚴重であつた。如何にもして夫の死を救はんとする夫人は、身に蜜を塗つて監房に行き夫の命をつないだのであるが、此も太子側の知る所となり、ついに夫人も亦、印度としてはあるまじき軟禁の状態に落入つたのである。其處で夫人は、自分の室の中で、釋尊の御住ひになる方に向つて、悲みを訴へた所、其の願に應じて釋尊の姿が空中に現はれ、此觀無量壽經を説き與えられたのである。經の内容は西方極樂の様相と此れを見るが如くに思念する方法とである。夫人は此教へに依つて苦樂反轉する現世に對して、永遠の善樂の世界なる淨土の實在を知り、其れを思念することに依つて不思議にも現實の一時的苦に堪える勇氣を持ち得ることを感ぜられたの

である。そして、事件は此の夫人の宗教的得達の状態が轉機となり、太子の反省、父子和解、一家和合と三段跳の急轉の落着を見るのである。此様な由來を持つのが觀無量壽經であるが、此の中に西方極樂を思念する方法は十六種説き示されてあり、其の最初の方法に日想觀と言ふのがある。經文を見ると

「念ひを一處にかけて西方を想ふべし。みな日を没するを見よ、正坐して西に向ひ、諦に日を觀すべし。心を堅住し、想を専らにして移らざらしめ、日の没せんとして其のかたちの懸鼓のごとくなるを見よ云云。」

と記してあるが、此は極樂ありと信ずる爲めには先づその方角を信ぜよとする意味から、極樂のある方角を知る方法で日想觀と言はれる。仕方は、日の没する様子を觀察して充分に印象つけて置いて、やがて他日に極樂を思念する時に、先づ目を閉ぢて此の印象づけられた日没の様子を見るが如くに思ひ浮べ、其れに依つて、此の日の没する彼岸こそ極樂であると思念するのである。善導大師は、此に註解して此日想觀をなすには、

「冬夏の雨時を取らず。たゞ春秋の二際を取れ。其日は正東より出で、直西に没する。阿彌陀佛の國はまさにこの日の没する所にあらる。直西に十萬億刹を超ゆれば即ち是なり」

とせられた。此によると、觀無量壽經の日想觀は春分と秋分との日即ち我々の言ふ春秋の彼岸の中日になすべきである。何となればその日こそ、太陽が「ま西」に入るからであり、その方向の十萬億刹をすぎた所が極樂に當るからだと言ふのである。「ほき内傳」と言ふ書物に

「彼岸七日間は、日ははるか東方藥師如來のろり殿の上を出で、西方阿彌陀如來の上品蓮臺の上に傾く」として居る。此に依つて見ると日本佛教では古來、必ずしも中日に限らず彼岸七日間を太陽が正西に入るものとして、其期間に日沒を拜して西方を知る様にして居たと見られる。

四

日沒に依て極樂を方向づけることを説くものが觀無量壽經で、此を春秋の彼岸になすことをすゝめたのが善導大師であるが、大師は、凡そ人間は何人に依らず又何事に依らず、迷ひの此岸から悟りの彼岸へ旅行くものであるとせられて、二河白道の譬を示された。

曠野を歩く旅人が東から西に向つて行くと、突然にして前面に南北を流るゝ大河のあるのに心付いたが、その大河を横切つては僅かに一本の幅四寸か五寸の白道が橋の如く通じて居るのみである。大河をよく見ると白道の南方は大河で北方は水河であり、南風に依つて火えんが白道を覆ふかと思へば、今度は北風に依つて波浪が白道を洗ふのである。西に行くには此の白道を進む外は廻り道もないのであるが、行くのは危険限りない。其処で斷念して退かんとすると、何時しか背後に群賊惡獸が迫つて居るのである。進退谷まつて苦慮して居ると、其の時に、東岸から聲が掛つて「汝決心して其白道を行け、死の難はなからん」と聞えたのである。旅人その聲に勢ひづいて立上らんとすると今度ははるか西岸から「汝一心正念にして其道を來れ、水火を畏れざれ」との聲援をきゝ其處で、今や勇躍して白道を進み出したので

あるが、五六歩進むと後方の群賊惡獸達は勿ち聲を歇け、「其の白道を行くのは危い歸り來れ。我等汝を害することなし」と誘ひの聲をかけて来るのである。然し旅人は最早此聲にたじろぐことなく兩岸からの勵ましの聲を信じて、白道を決然として馳行くと忽ちに西岸につき迎へた善友達と歡喜慶喜するるのである。

此譬話は、正しくは淨土信者の要心を説いたものである。水火の河とは私共の貪欲やたいまんやいかりの心である。白道を行くことをちゆうちよさせることの第一が此れである。東岸の聲は釋尊の教へで、西岸の聲は教主阿彌陀佛である。そして群賊惡獸とは、時には恐迫し、時には甘言を用ひて邪道邪見へ誘惑する惡人達である。そして誰が何と言はうと、佛の教へに従ひ念佛の一行道を直進すれば、困難に見える道も容易に通ずると言ふのが此話の主意である。自己の疑心たいまんはいたづらに白道の細さや遠さや危険さを論じて進まず、正しいことへのはげましの聲に耳をかさずしてついに甘言の誘惑に落込み行くのが、宗教に取つてのみならず世間一般にあり勝のことである。彼岸に彼岸の淨土を眼見身感するのは宗教の上のことであるが、世間の道でも亦、彼岸に自己の理想を再確認すべきである。何事に依らず目的の彼岸を判然と思念することこそ、其れへ進む情熱の熱源をもえ立たすことである。目的を確實に思念することは事の成る半ばである。彼岸は季節の上からもその成立つた思想の上からも、目的を確認し、目的に向つて努力する新たな情熱を湧き立たせるときである。

淨土信仰の本質 (二)

第一講 (續)

眞 野 正 順

ところで、かゝる三寶は、申すまでもなく釋尊を中心として開かれたものでありまして、佛とは釋尊であり、法とはその教法であり、僧とはその教團であつたのでありますが、これを信奉する立場よりしては、たゞ現れただけの――

――即ち、たゞその時代、印度の一隅に現れたところの一つの移りゆく求道教團のもつ構成としてのみ眺めていたのではなかつた。それならば、本當に全身をあげて歸依するといふ事は出来ません。眞實、心の底から、この全身をあげて三寶に歸依し上るのは、こゝにある佛教の至寶が單に一時に過ぎゆく現象でなく、そこに永遠を貫くものが、現前していることを見るからであります。信ずるからであります。眼に映るものは、褐色の布をまとつた一群の流浪の僧たちに過ぎないけれど、そこに、まごう方もなく、永遠を

貫くものが輝いておる。即ち釋尊の偉大なる證悟と人格とを通じて、まさしく――然も、言ひ現はしがたき確かさをもつて、永遠に輝けるものが、この教團を包んでおるが故に、人々は心からなる歸依を之に獻げたのであります。

原始經典をひらいて見ましても、この心は蔽ふところなく現はれております。佛陀釋尊は、滅亡より人類を救ふところの「不死の鼓」を撃つが故に。法は「不死なる最妙」(スツタニパータ小部)であり、あげて「不死の道」(ダムマパーダ)を示すものに外ならぬのであります。いかにして、果てしなき欲望の流轉を止め、この變化的存在から解脱して寂靜なる不死に還るべきか。これが教徒等の熱願でありました。そして、この永遠なる涅槃より、さながら現はれつゝある偉大なる人格に親待する事によつて、この

想ひを安んじていたのであります。

即ちこの現に目前に見る佛も法も僧も、さながらに永遠の眞實として深く之に歸依し上つたのであります。そしてその確信が樞軸となつて佛教は茲に成立したのです。即ちこゝにある現在三寶には永遠なるものが結合して、それがまさ／＼と現存するを見る事によつて、即ち、永遠なる眞實が、こゝに現存するを信する事によつて、三寶への歸依ははじめて成立したのであります。

目に見る釋尊は、たゞ褐衣を纏ふた老比丘の姿であり、渴きたれば渴を覺へ、病きたれば病苦に沈む、ともに現實の悩みの列に立つことを——弟子等は知つていましたが、夫れと共に、輝く永遠なるものが釋尊を貫いて現在することを、弟子等は復た確信してしました。

法も又そうです。事にふれて表はされる説法は、それぞれ部分的であり、その時々事情に結びついた一時のお話である事は、知つていましたが、然も永遠なる眞理が、その背後を壓して現れいでゐる事を、弟子はまた確信してしました。また、釋尊の教團は必しも常に理想的生活だつたとは云へなかつた。矢張りろ／＼な現實の悩みの中にあつた事は律などが、傳へておる所ではありますが、にもかゝらず、ここに永遠なるものが輝き出でゐる事を弟子等は確信しました。それをかく信ぜしめたものは、釋尊の無比なる人格の輝きの故でありました。かくてこそ、その全

身全生活をあげて歸依没入する事ができたのです。

然るに、やがて佛陀の入滅が來ました。未曾有なる人格の影が地上より消えゆくと共に、現前の三寶の上に大なる綻びが現れて來たのは是非ない事でありました。即ち、今迄教團の中心に輝いていた「永遠と現在との結合」の姿が消え去つて行つたからです。まごう方なく永遠な理想を實現し玉ふた無比なる人格の姿が消えると共に、あるべき筈の「佛寶」は佛教から見喪はれてしまいました。覺者佛陀の存在は單なる理念ではありません。空想ではありません。それは現實でなければならぬ。人に佛性あるかぎり必ず達すると云はれても、その現實が茲に無ければならぬ。それがいま消え去つたのです。それを求める心は、單なる師弟愛惜の情ではありません。教團の樞軸を求めてやまぬ必死の要請であつたのです。

おそらく、かゝる要請を擔ふものとして、あとに残つた大弟子の幾人かに、熱い期待の眼は注がれた事でありました。やう。また事實、その期待に近い幾つかは存したのであります。それがとても所詮、佛陀に較ぶればその片鱗のかゞやきに過ぎない。然もまた、やがて果敢なく消えてゆく束の間の姿です。その後、久しく且つ遠く、之を望めて、やうやく之れと望まれる俊秀の僧もあつたのでありますが、またやがて掻き消えて行きます。在るべき筈の理想實現の人格は求めるに難く、やうやく夫れに近きと思はるゝもの

も、また頼り得ぬ脆さの中にある。まこと、佛陀は人間中に藏する眞實の實現として常恒に茲にあるべくして、現實には求め難い空しき期待である。これが滅後の佛教徒の嘆息でありました。然も猶ほ、それが永遠なる信念は捨てる事はできません。それ無くて、佛教の信念は成立しないからであります。

このやうに一法一もまた一僧一もまた、然りでありました。滅後さま／＼に傳持せられ論議せらるゝ法は、互に諸部派の囂々たる異論談義に包まれたものでありまして、決して一筋に不滅の眞理を表はしておらない。僧伽もまた常に紛糾と分裂に満ちており、然も、教徒はこの中に永遠に揺がざるものを求めねばなりませんでした。

茲に佛教徒の關心は、今や強く、目前の浮揺する三寶を透して、永遠的なるものを探る心に驅られるのでした。然し、茲に注意すべきは、それは決して今迄佛教の中に無かつたものを茲に新たに創作しやうとするのではない。既に存したる三寶には確かに永遠と現在とが結合していた。生ける佛陀の下にはつきりと兩者の結合を見る事ができたのです。その既に存したりし永遠なるものゝ現在を滅後浮揺せる三寶の中に如何にして捉ふべきか。これなくて教團の宗教的信念に確立しない、茲に永遠を見る眼が次第に弟子等の中に開かれて來たのは極めて自然でありました。(續)

月のうた

月影のいたらぬ里はなけども

眺むる人の心にぞ住む

法然上人

春は花夏ほととぎす秋の月

冬雪さえて涼しかりけり

道元禪師

雲よりも高き所に出でて見よ

何とて月に隔てやはある

夢窓国師

西へ行く月をやよそに思ふらん

心にいらぬ人のためには

西行法師

にこりある水にも月は宿るぞと

おもへばやがてすむ心かな

願蓮法師

道もなく忘れはてたる故郷に

月は尋ねて猶ぞすみける

蓮生法師

なほからぬ心をかくす我かげに

いとほで照らす月ぞはづかし

太田道灌

私がほんとうに俳句を作り出したのは、潮會と云う、婦人會を終戦後始め、その會に俳句會の部をもうけてから二回目に無理に句會に出された時からで、氣も進まないながらやり出したのであつた。所が、高濱虚子先生もそ開先の小諸から歸えつていらして再び鎌倉に御住まいになるし、私達の先生星野立子先生もこの地にいらつしやる事とて、自然俳句會も度々開かれるし、私の寺の座敷も兩先生の會を催す會場におたのまれしたりして、だんだん句を本格的に作るようになった、と云つても、俳人などと云う處までは行つていない生徒である。

句の先輩の方が、私に「私は俳句を作る一念にこる、その事が私にとつては信仰であつてそれで満足して居るけれど貴女はどう？」

それでいいんでしょう」と申された事があつた。これは私には大いに異議があつて、無念無想になつて句作にふける事は私達のような生徒には、むずかしい事ではあるが、ただそれだけのことで、信仰の問題とはちがう。

私にとつては信仰は如來様だけが、その對象となるのであつて、只、句作している心が

統一され、無我の境地にあつたとしても信仰ではないと思う。お寺に育ち特別に教育されなくても小さい時から、如來様の御像の前で朝夕合掌して何をおいてもまず、如來様へと云う自然な環境にあつた事とて、俳句を作る爲、庭に出て空を仰いでも、大樹によりかかつて、又小さな草を眺めても、すぐ如來様

俳句と信仰

佐藤 治子

の大きな御姿をえがき御力をひしひしと感じる。他の方の自然の風物を眺められる氣持とはおのずと異なるものがあるのではないかと考へる。何とかその氣持の中で句作して十七字にあらわしてみようと思つても、下手な主觀をとまなう句になつてしまい、こればと思ひ投句しても駄目なのである。そう感じつつも

やはり普通の句の道にゆるされる作り方になる。勿論、私自信の句についての事で、もつと勉強し上手になれば、それがはつきりと十七字に云い表われて來る事が出来るかも知れない。

句會の前にあちらこちら歩いたり、座つてみたり、あらゆる角度から何か一つつかもととする。じつとして居るものでも動いて居るものでも、動こうとするものであつても又、一つのものに主觀を入れても客觀的にでも、實に無限であつて、人それぞれに異つた感覺でとらえて十七字にあてはめようとする。私は一人で庭先をふみ或いは樹下に佇んでもすぐに宇宙という事を考え始め、肉眼では見えなくても如來様の大きな御慈悲の中にある事を認識して、小さな虫と同様人も亦小さなかないものと思ひ、限られた四圍の景色からはかり知れない無限な世界を想像する。如來様があつてこそ初めて満足し切つた氣持をもつのである、立派な上人方が、和歌に如來様の御慈悲を讀まれている。もし俳句にも、それが表わされる處まで行けばよいかと考へている。(筆者、潮會幹事)

古寺めぐり

—寂光院—

安居香山

比叡の麓を溪流ぞひにバスで行く事しばし、大原の里で降りて細い畦道の露を拂ひ乍ら右に左に曲つて谷間深く入つて行くと、木立にこんもり包まれて、小さな御堂と書院、茶室とかなる寂光院がある。

私は友と共にこの五月末初めて訪れて半日を過し、都塵と喧噪からしばらく離れ、心行くまで深緑の中の古寺に心を休める事が出来た。

もしこの寺を訪れる事ができる人は先ず請ふて奥の小さな座敷に入り、前の障子を開け放つて静かに坐するがよい。五、六月の雨時ならば更によい。

白い糸を幾條も垂れた様に可成り太い雨が、みずくしい山の緑

を背にして降る煙とも雲とも分ち得ぬものが、山の麓から頂へと面を拭ふ様に流れると、山の緑は或は濃く、或は淡く、恰も一幅の大和繪の様である。

近くの楓の先からボタリ／＼落ちる滴は木の緑を洗い落すかとあやぶまれる。聞へて来るのは唯この雨の音のみである。

この音に耳を傾け瞑目するならば、誰しも夢うつゝの中に寂光淨土の中に自ら引き入れられて行く様に感ずるであらう。

私も又この中にあつて俗世を忘れた。そして物靜かな尼僧の口から流れて来る言葉に聞き入り乍ら、ローソクの淡い光りで見たこよなく美しい建禮門院の像の姿を思い浮べて居た。思へば門院も幾度かこの景の中に浸された事であらう。

勿論あの有名な平家物語の書き出しにある「生者必滅のことはり」を身を以て味はれた門院が、壇の浦の露と消えた人々を偲びつゝ、

思ひきや 深山の奥にすまゐして

雲井の月を よそにみんとは

と歌はれた氣持からするならば、私如きものが、僅かに都塵を離れてほんの一時目と心を慰むるが如き比ではあるまい。

それにしても變らぬは自然の美しさであり、變るは人の世の卑口であることか。

この寺は古く聖德太子の建立にかゝると言ふ。用明帝の追善の爲に造られたと言ふ可成り大きな本尊佛が、やゝ不釣合ひに小さな御

堂に安置されて居る。

御堂の内部は去る秋訪れた平泉の中尊寺のに似て居る。しかし青貝摺つた金色堂には「さみだれの降りのこしてや光堂」と歌はれた華麗さが今尙見られるが、この堂は余りにも粗末である。が私はそれを悲しまない。否むしろそれを嬉しく思ふ。特にあの大原御幸を思ふと猶更である。

近時私は京都を訪れる度に古寺を廻る事にして居る。それは東京では味へぬものを、歴史の薫りと共に興へてくれるからである。特にこの頃の様に惜しげもなく灰にされるのを思ふと居たゝまれぬ焦躁感にかられて今の内にと言ふ氣からでもある。

去年の秋であつたか、今は焼けた黒柱のみの金閣寺を訪れ、涙に一人くれ乍ら池畔の石上に坐り續けて居た事があつた。在りし日の姿を思ふにつけ去り難い悲しみに包まれて居た。殊に再建資金勸募と言ふ大きな貼札を見ては、言ひ知れぬ憎々しさを感じた。あの人は幸ひ昔のまゝの姿を此處に再現し得たとしても、一體幾百年と言ふ筈のある歴史をどうしてつけようとするのであらうか。ないよりましだと言ふなら、俄造りのパノラマと同様ではないか。淺慮な近代人が悲しい。

こんな思に耽り續けて居たものだ。

しかし私は單にこうした歴史的見せ物としての古寺とは別に、心のいこひ場としての古寺を訪れることを好む。この寺を訪れる前日桂にある苔寺を訪れたのもその爲である。

ところが「歸郷」と言ふ映畫で一躍時代の寵兒となつた苔寺は已に俗物化して居た。更に私の訪れたのは晴れた陽盛りの時で、木の間よりする明るい光りは苔の味を台無しにして居た。若し曇つた日か、或は細い秋雨の降る日、濕つた苔の薫りに浸り乍ら、行くともなく一人この庭を散策したならば、さぞよい事であらうと残念でならない。

それに比べると大原を訪れた日は一段とこの寺の價值を倍加してくれた。そして靜かな尼僧達のゆきとゞいたもてなしは更に心行くまで私をたのしませてくれた。ここで私は平家物語の古寫本を見ながら院主のたてゝくれた茶を頂いた。

「寂光院では、たゞ表面的ないはゆる美しさと言ふものでなく、美と言ふものの本質を表はした様な美しさを心行くまで味う事が出来ました。

又尼僧達のこの院にふさはしい靜かな奥深い落ち着きと、平和な悟りの前で私は非常に反省させられました。今までの埃つぽい落ち着きと深めのない自分の生活を考へるとき、私自身大きな罪を犯してゐる様に感ぜられました。」

右は行を共にしたクリスチャンの一友人からの便りである。

確かに、この寺は私をもこの感に導いた。そして京都はこの様な古寺をもつて、訪れる度毎に温いふところに私を包んでくれる。

私は尼僧達の手あつてもてなしを謝しつゝ、後髪引かれる思いで寂光院を去つた。そして再び紅葉に包まれて居るこの寺を訪れようと決心した。

お彼岸談語

中村 康 隆

彼岸櫻秋は月こそ西にあれ 宗因

春は曙草の名ある櫻、秋は西に傾く名月の頃。暑い寒いも彼岸までと待ちあぐねたお彼岸がやつてくる。春は春で心楽しく、秋は秋で心のなごむのを覚える。あのかしましかつた蟬時雨も衰え、氣がかりな八朔と二百十日もまずまずすんで、どうやら今年も豊年らしいと、ホツとした心持で勤めるのが、御先祖供養のための彼岸の諸行事、墓参り・寺詣で・年忌法要等の諸佛事である。

お彼岸とは、いうまでもなく梵語の波羅蜜即ち到彼岸を略した語で、布施等の六波羅蜜を修すれば俗世の迷いを離れ得るというところから、春分・秋分を中心に一七日の別時の修養を勧める我が國獨特の佛教的行事であつて、いわばこの頃はやりの何々週間の元祖といつたものである。

なぜこの期が選ばれたかという、それが

時正又は中道と呼ばれた好氣節に當り、晝夜均分の日とされるので、中道を説く佛徒により到彼岸の修養の好期として奨揚されたのであろうが、一つには二八兩月の上の丁（ひのと）の日の孔子祭（釋奠）が早くも文武天皇大寶元年（皇紀一三六一年）二月丁巳以來行われたのに對し、佛教側でも聖武天皇天平七年（皇紀一三九五年）八月丙辰宮中に於て大般若經及び最勝王經を轉讀せしめたのを初見とする（續日本紀）、所謂季の御讀經が催おされて來たからであらう。通例、彼岸會の濫觴を、やゝ下つて、日本後記十三に見える、桓武天皇延暦二十五年（大同元年、皇紀一四六六年）三月辛巳（十七日）の「崇道天皇の奉爲に、諸國國分寺僧をして、春秋二仲月別して七日、金剛般若經を讀ましむ」との記事だとしてゐるが、季の御讀經の轉化と考えてよいようである。崇道天皇とは前皇太子早良親

九月のメモ

一日 關東大震災記念日。大正十二年の此日關東一帯を襲つた大地震によつて東京横濱兩市は全滅になつた。

三日 宗吾法會 千葉縣印旛郡東勝寺内にある宗吾靈堂にて、徳川家綱の代、苦政に苦しむ村民のために直訴して家族と共に處刑された木内宗吾の靈を慰めるため前夜より參籠して念佛供養する。

七日 國際青年デー

九日 重陽の節句、栗飯を炊き菊酒をくんで祝う。八せん。

十一日 芝明神しやうが市。

空也忌。生國未詳。延喜の末年二十餘才、尾張國分寺に入寺、空也と號す。天慶元年より念佛を唱える傍ら諸氏を教化し、堀井、架橋等に努力し、時人より市聖、市の上人と呼ばれた。後、叡山に登り座主延昌について大乘戒をうけ、應和三年（九六三）六波羅密寺を建つ。奥州を廣く巡化し、天祿三年（九七二）九月京都にて入寂。寂年については七十、七十六、八十三等の異説あり、在世中教化と共に世益につくし、常に彌陀の名號を口にしていた。

王の謂で、その太官符が聚聚三代格三に收められてゐる。桓武天皇は其の後程なく崩御されたのであるが、廿三年十二月廿五日御不豫にて勅使を平城七大寺に遣わして誦經せしめて居られ、廿四年二月六日にも宮中及び春宮坊等で神靈の怨魂（早良親王の靈？）を慰めるため大般若經を讀ましめ、また諸國々分寺をして尙お聖體御不例の故を以て藥師悔過を行わしめ、同年八月九日には最澄（傳教大師）を殿上に召して悔過讀經せしめられてゐる。

し、廿五年二月廿三日には五百井女王が藥師佛像並に法華經を造寫したのが出來て前殿で齊會が設けられてゐるのである。續日本後記によると仁明天皇（皇紀一四九四—一五一〇年）の時にも屢々君主の安穩・人民の和樂・疾疫乃至は物恠などのために春秋二仲月に七日の佛事殊に大般若轉讀等を催した記事が散見する。玉體の御不豫とか疾疫流行とか凶事のある毎に佛事を營む例は以前にも多いのであるが、これらの二史書の記事からして、概ね此の頃にはお彼岸月一七日の佛事修行が盛んとなつてきたことが分るのである。更に延喜式（皇紀一五六五年撰）卷第二十六主税寮の記事中にも「凡そ諸國、春秋二仲月各一七日、金光明寺に於て部内の衆僧を請じて金

剛般若經を轉讀せよ」とあるから、延暦以來の風が當時次第に固まりつゝあつたことを知り得るのである。かくして平安朝の文學中、蜻蛉日記とか源氏物語卷二十九同四十七とかには、彼岸に入るとか彼岸の初め又ははてななどの文字が現われるようになる。彼岸がすっかり根を下ろした譯である。

彼岸會の興行には、平安中葉以後の淨土教の興隆も大きな役割を演じてゐる。春分秋分には太陽が眞東に出て眞西に歿するといふので、正しく極樂の方角を指し示すため、その日の落日を拜して日想現を修する風が起つて來た。それは善導大師が觀經疏（定善義）に「唯春秋の二際のみを取る。其の日正東より出でて直に西に沒すればなり」と説かれた日想現の解釋に従うものである。同じ觀經疏（散善義）の二河白道の喩えに娑婆を東岸、極樂を西岸と説いてゐるので、彼岸會の呼名も起つたのだらうとの説もある。新古今集に俊成卿の「今ぞこれ入日をみても思ひこし彌陀の御國の夕暮の空」という美福門院から極樂六時讀の繪に書く歌として求められた一首が收められてゐる。特にこの日想現で有名なのは大阪四天王寺の西門・石の鳥居の入日崇拜である。この西門には聖德太子筆とされる「釋

十二日 西鶴忌、日蓮法難會、日蓮宗の人、此日龍の口の法難に際し、上人が茶店の老婆の供養せる牡丹餅を食したとの故事により、片瀨の龍口寺にて始めたる牡丹餅供養を行う。

十四日 天王寺一乘會 大阪四天王寺六時堂にて、聖德太子の鳳輦を擁して行う。世人柿祭りともいう。

十五日 仲秋明月、石清水八幡宮、鎌倉八幡宮、宮崎八幡各枚生會

十九日 子規忌

二十一日 彼岸入り。

二十四日 秋分の日（中日）會津白虎除祭。

二十五日

龜戸天神大祭、岐阜水無祭

二十七日 彼岸あけ、聖岡忌、東京傳

通院開山、西蓮社了譽、眉間に半月痕ありしたため三日月上人とも呼ばる。曆應四

年（一三四一）正月二十五日、常陸岩瀬城主の子として生まる。八才にて出家、運

勝定慧より宗戒をうけ諸所を遊歴し八宗並びに神道をも研究し、十三年間を費す

野州大廳、千葉の千葉寺、等に轉住した

後、應永二十二年迎えられて小石川に來

り同二十七年（一四二〇）九月示寂。年八十。淨土宗復興の祖として迎がる。

九月のメモ

迦如來轉法輪所、當極樂土東門中心」の額があり、「極樂淨土の東門は難波の海にぞ對へたる、轉法輪所の西門に念佛する人まいれとて」といつた歌なども愛唱され、平安末葉以來今日迄彼岸といえは天王寺詣でが盛んである。室町期の作品たる謠曲「弱法師」は、高安某が春の彼岸に天王寺で一七日の施行（波波羅蜜の行）を行い、今は盲目となつた吾が子俊徳丸と巡り會ひ、恰も中日とてこの石の鳥居から共に遙かな落日を拜んで西方極樂を欣う日想觀を修することを筋としている。

かように彼岸と淨土教との關係は平安中期以後次第に密接になつたので、法然上人の出られた頃にも、彼岸に際しての彌陀念佛の興行が盛んであつたようである。本朝世紀によると久安六年（皇紀一八一〇年）八月廿五日、鳥羽法皇が鳥羽殿で彼岸御念佛を行わせられているし、康治元年（一八〇二）二月・八月、久安三年八月、同五年八月にも鳥羽阿彌陀堂の念佛を行われている。兵範記等にも、久壽元年（一一八四年）、八月十日鳥羽成菩提院の恒例彼岸念佛會（十七日結願）に鳥羽法皇崇徳上皇御二方の臨御、仁安二年（一一八二）七月三日成菩提院彼岸念佛始（十日結願）、嘉應元年八月廿五日彼岸始にて後白河法皇不斷

念佛を修せられ、同日鳥羽成菩提院念佛に臨幸、御讀經日時を改勘させられている記事がある。といつた具合であるから、一般在俗にもかなり流行したろうと推察出来るのである。近世になると、お彼岸は全く佛事の期間となり、民間では熊野比丘尼を呼んで地獄極樂の繪説きをさせたり、巫女を呼んで口寄せを行つたり、念佛講中では毎夜頭人の宅に彌陀像を掲げて鉦を叩き高唱念佛をし終を特に高く早く唱える責念佛にしたことが行われたものである（日次紀事）。京都の東山靈山寺（時宗）や空也堂（時宗）の念佛踊りも有名であるが、江戸では六阿彌陀參りが近頃まで盛んだつたもので、子規の句にも「野の道や梅から梅へ六阿陀」とある。

この六阿彌陀で想起す民俗に、日の伴などと呼ぶ習俗や、石の鳥居の七所詣りの風がある。例えば柳田國男編「歳時習俗語彙」を見らるゝとよい。丹後・紀伊・播磨等の諸地方では、今も彼岸の中日とかその一日とか又は社日などの行事として、日の伴・日迎え日送り・日天様の御伴・御伴・ヒマカイ（日迎え？）といつた名で呼ばれる、當日朝早く東の方の社寺や地藏尊に詣つて日の出を迎え、順次南から西へと廻つて入日を送つて歸るとか

或は又午前中は東に向ひ午後は西の方へと歩くとかといつた習わしを存するし、また、甲州では春の社日に石の鳥居を七つぐると中風にならぬといつて社日詣では連れを誘つて方々の神社を巡拜する風あり、伊豆壺山邊ではお中日に同じ鳥居詣りを行うといふことである。筆者所在の清水市邊でも社日には春秋とも觀音講中では連立つて石の鳥居の七所詣りを行つてゐる。江戸の六阿彌陀はこの風の淨土教化であるが、さて日の伴や七所詣りが天王寺の日想觀と關連のあることは明かだが、はたして日想觀から導き出されたものか反對に淨土教の日想觀が彼岸の頃のこうした民俗を背景に盛んになつたものかは、にわかには斷言出来ないが、彼岸行事が我が國にのみ獨自な發達をした背景に、淨土教と民俗との日本的な連關と融合のあることは興味がい。

お彼岸の行事の意味や習俗については、既に淨土トラクトの一つとして、竹中信常氏の「お彼岸の話」が出ていたので、こゝでは若干彼岸會發展の跡づけを眺めてみることにしたが、表題にかゝわらず、お彼岸團子ほどの味も面白味もなく終つたことを、詫びなければならぬ。（筆者、正大教授）

—— 大人のための童話 ——

蟲のお念佛



三喜まさし

「それは、ことういう譯なんです」
ミミズが、夜露にぬれたクサムラの中で、さつと一膝乗り出すと
やおら話しはじめた。

「私がいつものように、ボンボンダリヤの根本にうずくまつて、思索にふけつていたんです。すると、急に地上がザワザワとさわがしくなってきました。私は何事かしらん？　と思つて、そつと頭をもたげたんです。と、どうでしょう。またやつているんですよ。喧嘩

を。え？　いえ！　親子喧嘩ですよ……。まったく毎晩々々ドタバタうるさいの、なんのつて……まったく。しかも、あんた。親子喧嘩ですよ。親子でねえ！」

「誰がだい！　そいつは？」

長い髭をゆうゆうとしごいていた、エンマコオロギが落着いた態度で、目だけチラとミミズのほうに走らせてたずねた。

「え？　そいつですか？　それが、あんた。ほれ、例のオケラですよ。オケラ。オケラ」

「へ？　オケラ？　そいつはおかしいじゃないか？　オケラは地面の下にもぐつてゐるはずだが、地上にゐるとは……ええ？」

ミミズの隣で、ハエトリナデシコの葉にたまつた露をジュージュー音をたてて、すつていたアブが、ベツと唾をはきだしていった。

ミミズは、すこし身體を赤らめ、肩をすぼめるような

恰好で、

「ごもつともな御質問ですな。たしかに。しかしですね。この間のPTAの會合で、これからオケラ族が喧嘩をする時には、かならずよそさまの迷惑にならない場所でするように……と、まあ私達が提案したからなんですよ」

「ふむふむ。それは前からよくわかつとる。それで、その原因はなんじゃ？」

エンマコオロギが、澁い顔でイライラしながら、ミミズに督促する。

「それが、あんた。こうなんですよ。オフクロさんのオケラね？もう七十の坂を越しているかしらね。あの身體つきじや？とにかくオフクロさんが毎日のように、お念佛會に行くんだそうですよ。それをあんた。息子さんが『なんの金もうけにもならない處へ、行くことは許さねえ。そんなお暇があるんなら、ワカギクの根でも喰いやぶつてこい』と、まあ、大體こういつたんですよ」

「お念佛會へ行つたつて、いいじやないか！」

アブがブリブリしてきた。

「アブさんが、ここで怒つたつて仕方がありませんよ」

ミミズが輕蔑した口調で答える。

「えーと。あそこの伴は、たしか三十二・三だつたはず……」

「そう、そのくらいでしょう。で、オフクロさんだつて、そういわれちや、だまつていませんや。『何を小僧の分際で生意氣な。これまでお前が大きくなつたのは、一體誰のおかげだ』という鹽梅で、髪はザンバラ、目玉をカツとむきだして、はじまつたわけなんですよ」

ここまで話したミミズは、一足、後にちちんで『ジー』と鳴いた。

「うーむ。そうですかねえ。困つた息子さんだ。で、あんたが仲裁を買つて出たという譯ですな？」

アブがニヤニヤ笑つてたずねる。

「ええ。まあ、そうですね。私だつて、何も好きこのんで、仲にな

んか入りたくありませんよ。しかし、とにかく安眠妨害ですからなあ。重い身體を引きずつて行きましたよ。まつたく。それで、オフクロさんと息子さんの話を聞いてやつて、まあまあという譯で、ようやく別れさせましたよ」

「うまくいつたんでしうかね。それから……」

今までだまつて、羽をなで廻していた、蚊トンボが、聞きとりにくい程の低い聲でいつた。

「だから、それをこれからミミズの旦那に話してもらおうという譯じやないか。あわて者奴が」

アブがまた、ブンブンいつて怒つた。

「まあまあ。そうアブさん。怒りなさんな。さて、その後はどうしても、親子の間がうまくゆきませんでな。とうとう別居してしまいましたよ。息子さんの方は、あんた。どんたどこの馬の骨……いやいや。これは失言。どこのオケラの骨かわからない女を、ひつぱりこんできて……」

「ミミズの旦那。一寸まつてくださいよ。どこのオケラの骨かわからない女を、連れてきたと、おつしやいましたが、あの伴には、ちやんと親のきめた奥さんと、二人の子供までいたはずですがねえ？」

これは面白くなつてきたとばかりに、アブは乗り出してきて、興奮した口調でたずねた。

「ええ。れつきとした令夫人と、お坊ちやまがいますよ。ですからナンバ１２……早くいえば、おメカケさんというところでしょうなあ」

「どんな女かね？　きれいかね？」

エンマコオロギが、目を輝かせた。

「そうですね。まあまあ見られる顔でしょうかね。噂によると、ヒマワリの下町の酒場で、女給をしていたそうですがね」

「ああ、ヒマワリの？　あそこはいい處だ！　實にきれいで、第一氣分が違ふよ。それにかわいい子がたくさんいるからね」

アブが羽を打ちならしながら、さけび出した。

「まあまあ。そう興奮しなさんな。そんなことをいうと、アブさんの奥さんにいいつけますよ」

蚊トンボが、チラとアブをにらみながらいった。

ミミズは『ジー』と低い聲で鳴くと、

「静かに静かに。そう皆さん、諜り出さないでください。まあ、それから一號さん、二號さんと、せまい家に難居ですよ。今は、もちろん、あいかわらずドタバタやっていますかね。しかし、どう考えども、道義も地に落ちましたなあ。まつたく」

「それでオフクロさんは、どうしたかね？」

エンマコオロギは、なおも髯をひねりつづけて、たずねた。

「それが、かわいそうに、あんだ。七十にもなつて、どうしてくらしていきましょう？　養老院に入つたらしいですが……」

「いや。そんなことはありませんよ」

蚊トンボが、突然文句をいい出した。

「私がこの間、聞いた話によると、たしかテントウ寺にいららしいですよ。あそこの和尚さんがいい方ですからね」

「ふーむ。なるほど。テントウ虫さんだつたかね。あそこの和尚は？」

と、エンマコオロギ。

「ええ。そうです」

「なるほど。それはいいじやありませんか」

と、アブが、ホツとしたような聲を出した。

「どうだろうか？　これからひとつ。テントウ寺に行つてみないかね？」

エンマコオロギが立ちあがつて、大きなのびをしながら、變な聲を出していった。

「行つて、何をしようという……」

蚊トンボがふしぎそうに、小首をかしげたが、

「しれたことさ。オケラのオフクロさんを、なぐさめてやるんだ」という、エンマコオロギの聲に、打ち消されてしまった。

「さんせい！」

「大さんせい！」

アブも、ミミズも、蚊トンボも、異口同音に答えて、立ちあがつた。

そこで四人は、いえ、四匹は、ゾロゾロ、ビヨンビヨン、ブンブンと連れだつて、テントウ寺に向つた。

四方八方に腕を伸している、八手の根本に、テントウ寺は静かに眠つてゐる。そして、時たま、オケラのオフクロさんの、讀經の聲

であろうか？ たえだえに聞こえてくる。

「おい、ここだよ。テントウ寺とは」

「はいつてみよう」

エンマコオロギが『エヘン！』と、大きく咳ばらいをして、

「えー、ごめん。あー、ごめん」

と、案内を求めた。

すると、赤い水玉模様の袈裟をつけた、テントウ虫和尚が、小さな頭をふりふり出てきた。

「おー、これはこれは皆の衆。おそろいで……ささ、はいらつしやいしやい」

「いやいや。夜分大勢であがりました、何とも……。實は隣人のよしみとでも申しますか。オケラのオフクロさんを、なぐさめにきたような次第で」

エンマコオロギの後にいた、ミミズが一足前に進み出ていった。

「それはそれは御奇特なこと。オババも元氣でおつとめを續けておりますでな。では、すこし待たつしやれ」

和尚は、靜かに本堂の方へ戻つていった。やがて、讀經の聲がピタツとやんだかと思うと、オケラバアサンが、どこかしら昔と變つた、すきとおるような顔だちであらわれた。

「これは皆様。おいそがしい處をありがとうございます。只今和尚様よりおうかがいいたしまして、このババは皆様のあつちお情に、涙ぐむばかりでございます……はい」

こういつて、オケラバアサンは、そつと衣のそで口で目をぬぐつ

た。

「うんうん。無理もないことだ。そういつてはなんだが、息子さんをお持ちになつてねえ。これも因縁ですかねえ。まづたくの話が」

蚊トンボが、妙にあわれつぽい聲を出した。

「ばかやろう！　こんないいオフクロさんを持ちながら、畜生！

メカケを圍うとはなんてことだ。虫ケラにも劣る奴だ！　いえさ。この四匹で明日にでもなつたら、早速息子さんにこんこんと説教してやりますぜ」

アブが身をふるわせて、すごい剣幕でさけぶ。

「はいはい。皆様のお腹立ちはごもつともなことでございます。がこのおい先みじかいババの一生の願いでございます。どうぞ、家の伴だけはいじめないでやつてくださいました」

オケラバアサンは、オロオロ聲で、四匹の顔を見廻しながら、こういつた。

「しかしさ。オバアサン。あんなに毎晩喧嘩をしていた息子さんを……。許すも許さないもないでしょう？　ばかばかしい！」

「そういうてくださいますな。ミミズさん。あなたには、ずいぶんお世話になりましたものなあ。いえ。私もはじめの中は、いつそ一思いにと考えつめたことも、二度や三度じやございませなんだ。ありがたいことに、テントウ虫和尚さんの處に、おいていただきますようになつてからは、すつかり心が變りました。このババの鬼のような心も、もつたいたないことでございますが、御佛様のみもとで、

静かにお念佛をおとなえさせていたでおります中に、何かこう……青空のように、スカッ！と澄んでまいりましたな。いえ、こう申しますと、働きざかりの皆様には、年よりのタワゴトというてお笑いになるかも知れませぬが、このババが一心にお念佛をおとなえさせていたでおりますと、息子の心も、自然……とこのババが何もいわないでも、なおつてしまふような氣がしますでな。和尚様もそう申されました」

オケラバアサンは、ボツンボツンと語りつづけた。

「ほー。そんなもんですかねえ」

エンマコオロギが、髭をひねり、感心している。

「はいはい。そんなものでございます。昨日も和尚様が、伴の家の前を通りかかりますと、和尚様のお姿を見た伴が、表にとび出てまいりましたな。『母は元氣でおりますか？ この俺を憎んではいませぬか？』とな。あなた。たずねたそうでございますよ。ねえ。本當に息子の心の中にも、ありがたいことに、佛様が……いえ、良心が芽ばえておりますでな。ありがたいこと……ナムアミダブツナムアミダブツ」

オバアサンの目から、小さな涙が一滴ころがりでた。そして、無理に笑つたので、顔が妙にクシャクシャになつてしまつた。

「どれ。おつとめの時刻のようでございます。皆様、折角のお情、

このババにとつて、身にしみる程、うれしゅうございますが、

このような達者な身體でおります故、御安心くださいませ、どうぞお引きとりくださいませ」

なるほど、テントウ虫和尚の聲が、本堂のほうから聞こえてくる。「そうですか？ では元氣でな、オバアサン」

エンマコオロギはこういふと、三匹をうながして、テントウ寺をはなれた。

夜もふけ渡つた。星がチカチカかがやいている。讀經の聲がなおも、三匹の後から流れてくる。

「ひとつ、やつてみるか？」

ヒンネリだまつていた、エンマコオロギがこういいだしたので、アブもミミズも、蚊トシボも立ちどまつて、

「え？ 何を？」

と、たずねて、一勢にエンマコオロギの顔を見た。

「お念佛をよ。お念佛をよ」

自分自身にいい聞かせるように、こういつたエンマコオロギは、はずかしそうに髭をビリビリうごかしつつ、低い聲でお念佛をとなえはじめた。

ほかの三匹も、それぞれの聲で、エンマコオロギの聲に和して歩きはじめた。静かな、沈んだ聲であるが、どこか力にみちたお念佛となつて、いつまでも、どこまでもつづいていつた。

(筆者、新進童話作家)

本誌誌代は、十一月號より最近の用紙其他の物價事情により、止むなく一部三十圓と致します。送料は追つて郵税決定次第お知らせ致します。



大樹寺と家康

佐山學順

徳川家康の先祖三河松平八代の中、初代親氏及び泰親の墓所は山岳地の松平村浄土宗高月院に、そして三代信元は當岩津町浄土宗信光明寺に其墓地がある。四代松平親忠、岡崎安城の城主となるに及び一には祖先の靈を祀り二つには数々の戦争に關し怨親平等菩提の爲めに大樹寺建立せらる。時に文明七年、(四百七十七年前)勢譽愚底上人を開山とす。松平家は代々信仰の家として大樹寺其他有縁の寺々の護持に努めらる。當寺現在最初の建造物たる國寶多寶塔は七代清康の寄進たり。信仰家の子孫としての家康は幼少より佛縁の深かりしは偶然ではない。特に大樹寺との因縁は所謂大樹寺陣である。

大樹寺陣

永祿三年五月桶狭間の役に盟主今川義元戦死の報を聞き、大高城を守れる家康、時を謀りて城を逃れ五月廿日の夜半矢作川を渡りて大樹寺に入り、祖先及び父廣忠の墓前に生害を謀らんとし當寺十

三世登譽上人に事の急なるを告げ、祖先及我身の亡き跡を吊ひ給へと袂別の辭を述べて直ちに墓前に進まんとせる時。上人曰く、死は易く生は難し、今や御身の死を決する時にあらずと切に諫めて浄土の教旨を説き、祖先親忠の信仰及び武士の心得等を懇に説示して國く死を止めらる。

登譽上人より家康へ法話

上人公に問ふて曰く、君弱冠より戰境に向ふ、其心唯敵を殺害するに在るか。公曰く武人の心實に然りと。上人問て、殺害何の爲ぞ。公答へて、勇奮ひ功を樹て城を抜き國を奪はんことなり、然して天下を領せんと。上人曰く、天下を領して是れ何んするものぞ。公曰く、普く武權を執るが如きは則ち門葉を興隆し子孫を榮耀し名を後世に擧げて父母を顯はさんのみと。上人曰、天の與へざるの國を劫奪するは之れ奸盜の所爲なり、假令運啓き一度天下を領すとも非道にして之を得たるは何ぞ子孫に傳ふる事を得ん。已れ獨り榮華に傲

るとも猶一場の春夢の如し。命終の後必ず地獄楚毒の苦を受けて何の益かあらん。公の曰、併しながら是れ武業なる時は則ち好惡を測らず如し其後世の昇沈は幸くは師導き給へ。師曰く、君は武事を以て奸盜の事と思へるか、夫れ作業に善惡なし、用ゆる者の心期に由る、我が佛教より之れを觀れば武業は菩薩の善巧方便ならくのみ、公須く聽け己を利して國を爭ふ之を奸盜の武となし、世の爲めにして兵を交ゆ、之を菩薩の慈となす。夫れ國主の心たるや、體泰かに心順にして暴虐をなさず、當に天下の父母となりて萬民の塗炭を救ふべし。公、内に菩薩の行を秘し、外に將軍身を現せば、殺も殺に非らず伐も伐にあらず大悲の心度生の業自他同く解脱を得て等しく淨土に生せん。是の如くにして國を得權を執らば、千秋萬古定んで芳を傳へん。公宜しく之を信愛すべしと。時に公大に感悟し恰も甘露を飲むが如く、忽ち善心に住し拜して十念を受け進退決を得て上人の指示を待つ事となりぬ。滯寺二日突然織田の軍兵大樹寺を圍みて、菩提所を燒き松平祖先の墳墓を滅せんと謀る。登譽の曰く檀主の危難あるは御門の厄に係れり。我身命を賭して公を擁護せんと。

即ち寺僧七十人、村民二百餘人、十八歳の家康、從者十八人、寺門を固む。師、白布を以て旗を製し題して厭離穢土欣求淨土と大書し庭向の大松に掲げたる。時恰も上人に隨從せる祖洞坊了傳といふ七十人力の豪僧、公の馬前に口取をなし、總門の貫木を打振り縦横無盡に群がる。織田勢を降伏し、即日岡崎の居城に入らしめたりと。

旗掛の松は二十數年前枯死し古木一片現存す。貫木は之を神格化して御貫木神とし、尾陽の垂相源敬公一たび見て、信敬寺寶とせら

る。將軍家にありては毎年幕府に迎へて大祭を行はれたり。その東海道往復の途次、諸候と相會するや、諸候お籠より下座して敬意を表せしといふ。

家康出陣の時は大樹寺の方角に向つて十念を唱へ、陣中も九郎本尊の持佛に稱名念佛意らざりしといふ。更に登譽上人の指導に従ひ布を以て鎧下の袍衣を製し、背上彌陀の寶號を念誦加持せるを用えられしと。登譽曰く之し此の衣は信の標のみ、之を服すと離信無き時は無用の設けならむ。今之を公に與ふ君が信の不退ならん事を欲してなり、夫れ能く受持し玉へと。公喜んで頂受すと。

家 康 眞 筆

大樹寺寶家康眞筆に

我弓一弓の家に生れ身を軍陣に寄せ度々危難に會ふと雖九部本尊の慈悲を以て免かれし事、誠に廣大の佛恩なりと

量りなき命は彌陀の誓にて、山を切抜く六字とはなる。

家康登譽上人の感化を受け彌陀大悲の恩德に酬ひんとの信仰と、天下萬民の平安を希念したるは、宗教的生活の體驗者として尊敬すべきものがある。殊に遠大なる理想を懷いて隱任自重、不窟不撓、あらゆる苦難に應え、困乏に打勝ちたる小生涯は、立身出世の模範として利己的投機的に放逸苟樂を怠る現代人に暗示を與ふものがある。其如何なる困苦の中にも感謝の悦を感じ現當二世の法悦は眞に信仰に生きたるものゝ利益である。

其歌の意を見るに、無量壽如來の本願に乗じて有爲の奥山を越えて無爲極樂の往生を期すと未來の大生命に生かさるゝ事を喜び、又現世にあつては、常に大悲の惠の下にあらゆる邪魔(やま)を逃れて念願の成就する事を悦ぶと解する。

更に所謂東照公遺訓として人間生活の幸福道を辿る文を見るに、人の一生は重荷を負ふて遠き道をゆくがごとし。急ぐ可からず不自由を常と思へば不足なし。こゝろに望むことは困窮志たる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒は敵と思へ。勝事はふり却て負くることを知らされば害其身に到る。己を責めて人を責むるな。およばざるは過ぎたるよりまされり。

慶長八年正月十五日

家康花押(大樹寺所藏は眞筆寫)

佛の戒は結局、貪(愚欲) 瞋(怒) 痴(愚と痴) の三毒の煩惱といふ自我を制して無我の愛に生きる事である。更に一步進めていふなり煩惱を其まゝ菩提たらしむる修養の中に個人、家庭社會の平和と幸福を味ふ事である。

佛教信仰の家康は、佛語の難解を萬人向平易なる文句の中に、信仰的生活の鼓吹と其幸福道を暗示せんが爲めに、初めに、人生を總觀して大器晩成と健實なる生活を示され、貪るな、怒るな、愚痴は禁物と教へられた。愚痴には二様の意をふくめて、愚と不平である。勝事はふり却りてとは、愚かなる迷信である。あへて戦争ばかりではない、勝負事や商賣上の事にも世人への暗示がある。不平は悲みである。不平のない生活に感謝がある、喜びがある。不平のない

い所に進歩がないといふ人もあるが、佛教は報恩行と菩提心、(理想を求める心)の中に精進を勧める。

戰國爭亂の時代を變じて二百六十餘年の大平の世を現出し、天下民衆の幸福に資したならば、矢張り家康の信仰の賜であると共に其感謝の生活、精進の處世は長く國民の銘記すべきものである。復興日本爲めに敢て此の一文を掲ぐるものである。(筆者 マスター・オブ・アーツ大樹寺住職)

維持會員募集

一、維持會員 五百名

一、維持會費 一ヶ年金五百圓

一、特典 本會發行の諸印刷物は發行毎に一部宛御寄贈申し色々の御依頼には優先的に御奉仕致します。

一、申込方法 葉書に維持會員申込みとして、住所、氏名明記してお出し下されば、會費清算の上御通知致します。

左に今月まで維持會員を御申込みの方々に對して、誌上厚く御禮申し上げます。(敬稱略)

玉木弁戒(神奈川)、小川金英(岩手)、高麗義光(神奈川)、慈教寺(北海道)、西應寺(港區)、良忠寺(横濱)、伊藤智源(江東)、鈴木昌子(静岡)、淨正寺(宮城)、鈴木平一郎(同)、川波源四郎(茨城)、實相寺(清水)、田中林助(三重)、谷口眞保(和歌山)、田代好雄(佐賀)、石田典定(台東)、川村悠穂(静岡)、内田信宏(島根)、淺野靈玉(京都)、中村眞瑞(仙台)

芝園だより

◎八月十一日、藤田氏百ヶ日。世にいう去る者日々に疎しとは逆に少くとも浄土に関する限り、藤田氏は日々にその存在の意味が大きく感ぜられる。

◎講和が實現の問題となつた。だが心にすべきは、人と人、國と國との約束事も、それが守られてこそであつて、條約の裏付けとして國家的信用と國民的信念を欠いては、繪空ごとでしかない。ユーゴ

ーがレ・ミゼラブルを書いた中心のテーマは「世の中には法律では裁き切れぬ罪人がある」ということであつた。いくら法律や條文を作つたとて、それは所詮綱の目である。水は自由に通りすぎる。此の綱の目を塗りつぶして、一滴の水も洩らぬようにするものは何か。

◎此の回答を諸氏は本誌の中に見出して頂きたい。

◎眞野先生、春以來の御病氣も常

に變らぬ御療養にて事なく済み、初秋と共に舊に歸られ、かねてのお願いたる本誌への執筆も順調を約されている。本月はその第二回

◎吉田絃二郎先生、八月初旬信州沓掛けに御旅行。清涼の信濃路に杖をひかれ、その詩箋に一段の實りを得てお歸りのことと思う。御健筆を期待して下さい。

◎三河大樹寺貫主、佐山學順先生は今秋ハワイを経て渡米、かつての遊學の地を訪れられるとのこと。浄土宗のアメリカ進出はますます盛ん。先生の御活躍を期待する。出發前の急がしさの中に徳川氏との因縁にからむ信仰の指針を賜わつた。

◎鎌倉の大佛殿も秋の遠足に賑わうことであろうし、庭内の茶店も立派に改装されたとのこと。文化都市の文化センターを承振される先生御夫妻には、揃つて本誌のためにそれぞれの御専門の余滴を示められて、ありがたし。

◎清水寶相寺の中村康隆氏は毎月

着實な佛教民俗を、正大の安居香山氏專攻のシナ學とは角度を變えての隨筆をそれぞれ寄せて下さつた。

◎最後に往生自身、先月のなまけをとり返すべく懸命。(竹中)

◎研學と寺務とに寧日なき竹中氏、此夏來不快氣味であるが、病床益々編集のペン健やか。十月には放送も行う張切り方である。

◎八月號、吉田絃二郎氏の文中に紹介せられた故藤田氏令嬢由佳さんの文に對して多くの讀者から、切々たる愛情と聲援が集つた。世俗に染まない至純の文章は人の心を打つ。

◎コムバニアンをばら／＼めくつて見ていたら、日本の空襲時代の防空準備のような寫眞があるの

で、之は昔の本かなと思つて表紙を見ると紛れもなく今年の五月號。又、ラジオのタイム・オブ・デフエンスは、戰の準備を訴えつづけている。この雰圍氣の中で講和が結ばれる。過去の戦争犠牲者の冥福を祈り、又、我々の信念を強くしたい。(前田)

入會・繼續御送金について
會費半年分一三八圓、一年分二七八圓を、なるべく安全確實な振替で御送金下さい。たと誌代を振替用紙に所定事項を書いて窓口へお出しになるだけでよいのです。用紙表の通信欄には、新規・繼續を明記して下さい。

「浄土」 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年八月廿五日印刷
昭和廿六年九月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯・眞野正順

發行人 眞野正順

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

郵政東京八二一八七番
會費郵便B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共

大正大學教授

佐藤賢順著

信仰への導き

B五半截 十六頁
一部 七圓

近來ラヂオに講演に縦横の活動をつづけられる著者が
想を練り、思いを新たにして、信仰の眞實なる姿と之
れに至る道を平易簡明に説き明かした絶好の信仰入門
書。

藤井實應著

一枚起請文

B五半截 十六頁
一部 七圓

浄土宗布教の第一線に活躍されている筆者が、特に本
會のために、宗祖信仰の實質を從來の型を脱して新し
い思想と深い信仰の上から、懇切に指し示めされた、
念佛信仰者必讀の小冊子。

東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

今回、浄土トラクトと並行して、低廉、簡明、
輕便な

「浄土信仰シリーズ」

を發刊致します。

講和の秋、傳道の好季。

是非奮つて御申込みをお願い致します。

お十夜

藤田寛雅著

參詣手帖(お塔婆、お墓、位牌、お珠數、法事)

前田龍海著

續刊豫告

五重の話

大野法道著

お經の話

佐藤密雄著

お念佛

佐藤賢順著

御先祖

中村康隆著

おつとめ式

佐藤良智著

體裁 文庫版 四頁

定價 一部二圓五十錢 二百部以上 二圓三十錢

送料 五十部迄六圓 五十部増毎に六圓増